

恋人たちの絵本

早乙女勝元＋永島慎二



恋人たちの絵本

著者・早乙女勝元 永島慎二

発行・一九七五年九月五日 二版

発行者・長谷川佳哉

製版所・株式会社朝日製版

印刷所・稲村印刷株式会社

製本所・株式会社川島製本所

発行所・すばる書房盛光社

東京都文京区水道一―五―二四

☎ (03・815・2389)

コード・0093・20103・3740

恋人たち

の絵本



早乙女勝元＋永島慎二



目次

第一話	ペンフレンド	4
第二話	特価セーターの橋わたし	18
第三話	別れのチャンス	32
第四話	ひろった手紙	46
第五話	恋は積極的というが……	60
第六話	デイトのあとに	74
第七話	結婚式のその夜に	88
第八話	若者はポンコツカーで	102
第九話	ラーメンの恋人	111
第十話	初恋よ、さようなら	130
エピソード	プロポーズの時に	114

ふたたび第一話にもどって一年後――



夕映えの町の中で

ある町に、踏切がありました。

その踏切に、遮断機があります。

その遮断機は、いつもたいてい降りていることが多く、上り下りの電車がひっきりなしに交錯して、ですから、“あかずの踏切”とよばれているのです。

あなたの町にも、そんな踏切がありますね。

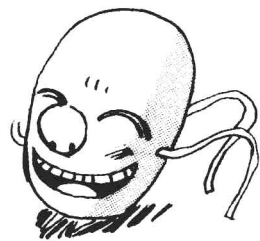
私の住んでいる下町にも、あります。チンチン……と警報器が鳴って、遮断機が降りっぱなしになっている前に足をとめていますと、むかい側の遮断機の前に、ひっそりと、たたずんでいる少女が目にとまりました。どこのだれやらわかりません。でも、その額をおおった黒ぐろとした髪と、白いほおと、そのなめらかなほおにやがて夕陽がオレンジ色に映えて……

あの娘は、きつと、恋をしているのかもしれない、と私は思います。

その恋はどんなだろう……と、私はさらに考えます。

すると、私の脳裏に、ふいにいきいきとあの娘があらわれ、ほほえみながら歩きますのです。

ここには、十人の少女が登場します。彼女たちは、一つの遮断機をめぐる、ほのかな思いに心を波だたせ、ときには恋を得、あるいは愛を失い、それぞれの青春をいろどっていきます。夕映えの町の中での、小さな愛の物語です。





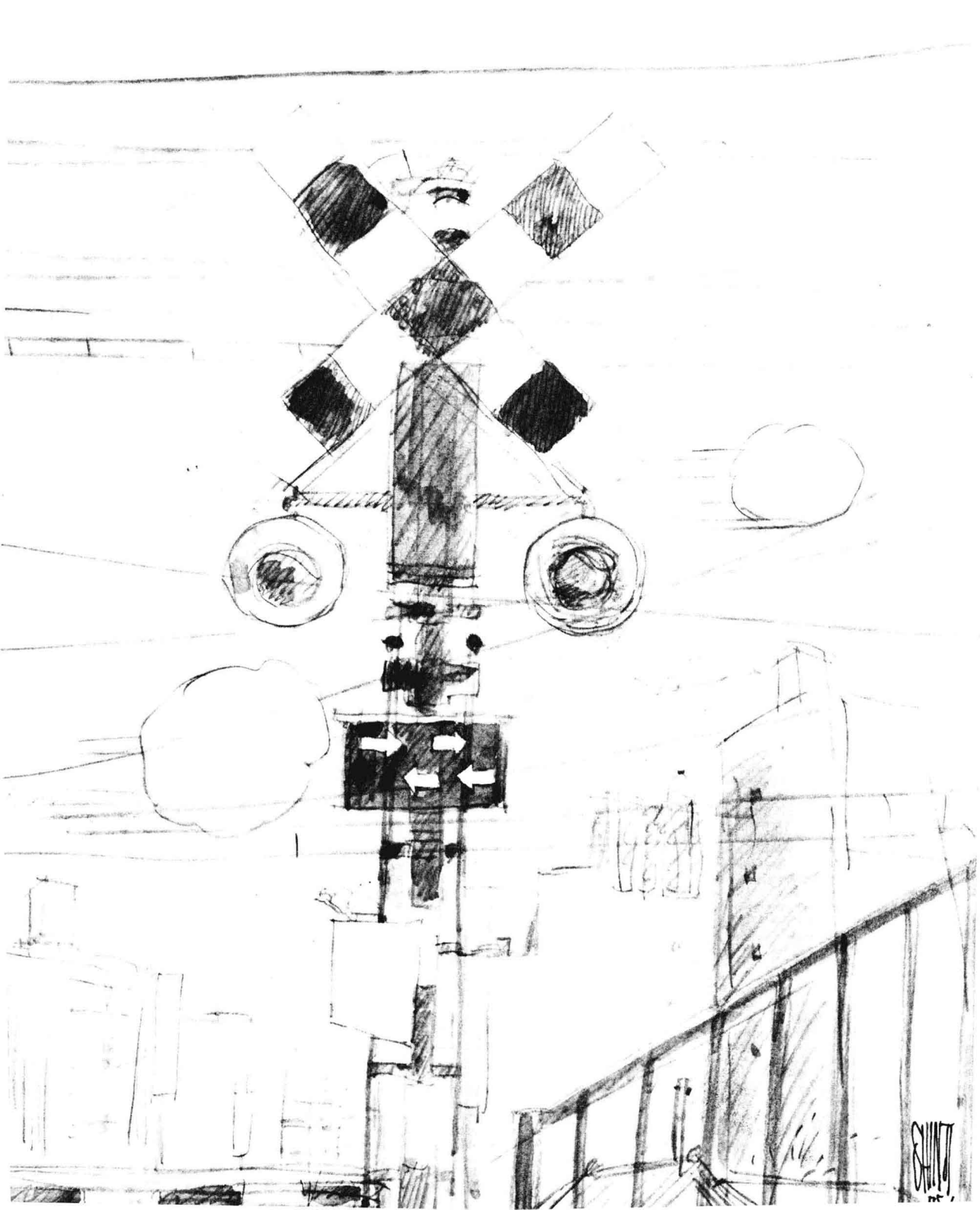
第一話 ペンフレンド

バス通りの先に、踏切があった。

もしも、あの踏切が、そのままスナリと通れたら……と、佐和子は清一と肩をならべて歩きながら、ひそかに思う。

そうしたら、この人との友情を継続していこう。でも。その反対に遮断機が行手にたちふさがったならば、そのときは、思いきって目をつぶりたい。白紙にもどすということばは好きでないが、でも、はじめからなにもなかったと思えば、あきらめもつくんじゃないのかしら。





冬の日はみじかかった。

ついさつきまで、小春日よりかと思えるほど、やわらかな日ざしで、ページュ色に息づいていた町なみは、もう薄墨を流しこんだような闇につつまれ、そして風が出てきた。髪の毛をさかだてていやな風だった。人びとはきぜわしく家路を急ぎ、車とバイクが騒音をまきちらし、歩道のない通りのはしから、どっと砂ぼこりがまきあがる。

「寒いわ」

歩きながら、身をすくめると、

「寒いですか」

清一の声が、頭上にぼそつとふつてきた。

「列車の時間、何時でしたっけ？」

「大丈夫です」

「大丈夫って、まにあわないと……」

「ええ、まあ」

すべて、この調子である。

こちらがきけば、おそろしく高いところから、とりとめのない声があびいてくるだけで、表情もわからない。ちよつと背が高すぎて……とはきいていたが、まさか、一八〇センチもあろうとは夢にも思わなかった。まるで電柱。かゆいところまで、手のとどかぬものかしさがある。

もつとも、その清一が、おみやげにいつて持ってきたのが、肩たたきと孫の手だったとは、なんという皮肉なことだろう。



佐和子は、じつはきょう、はじめて清一に会ったのだった。

若杉清一、そのスマートな、さえざえとした名前の若者を、彼女が知ったのはほかでもない。佐和子が、愛読しているある青年むけ雑誌に、「私の一日」と題する五、六枚ばかりの生活記録を投稿したことはじまる。それが活字になると、末尾に小さくついていた住所をたよって、一通の手紙がきた。二十一歳の未知の青年だった。

佐和子の文章に共鳴し、今後の友情をわかしあいたいという。そううまいとはいえない字だったが、一字ずつきざみこむように、ていねいに書いてあった。

「ぼくは、ちよつと背が高いのですが、つとめが電力関係なので便利です。高い電柱の上で仕事をしていると、電柱が電柱にしがみついているようだと、みなが笑います。床屋へいけば、店のおやじさんが、手がくたびれるといってこぼしますが、給料日には、かならずいくようにしている。つぎの日になると、金がなくなるからです」そんなかざり気のない文章が、佐和子の心をとらえ、山梨県の山奥の東電営業所に勤務しているというまだ見ぬ若杉清一に彼女は好意を持った。そして、文通がはじまった。

そのペンフレンドが上京してくるという知らせに、佐和子の心はずむ。朝、出がけに路上から空にのびた電柱の前で、ふと足をとめ、ふりあおいで、ひそかな期待に、胸をときめかせたのだったが……。

結果は、失望だった。

佐和子のイメージは、完璧なまでに裏ぎられた。

駅前の雑踏を、首二つぶんもつきだして、のそのそと歩いてきた男が、佐和子のあじさいもようのバッグに目をとめて、

「ぼく、若杉です」

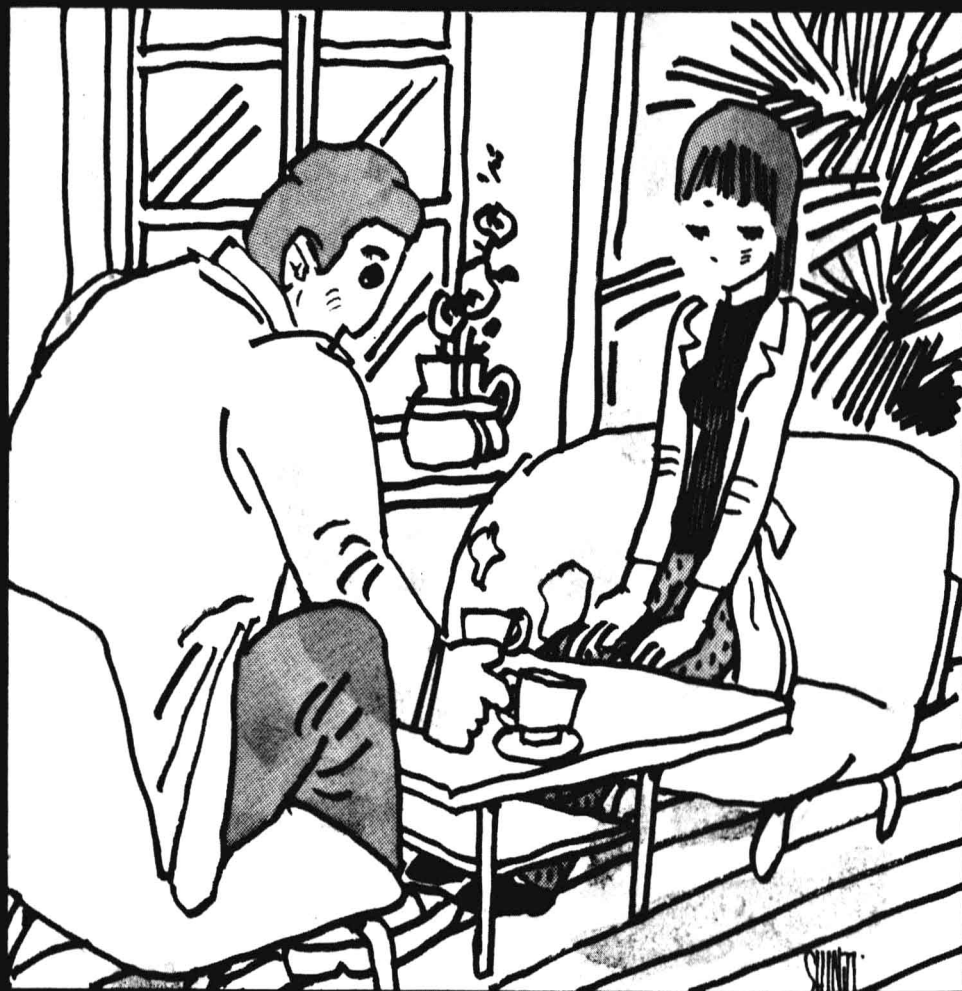
といったとき、佐和子は、まさかと目を見はった。別人ではないか、とさえ思った。つま先だって見上げれば、若杉清一は、いまはやりのプロレスラーで、なんとかという評判の男ににておりどこか鈍重な感じで、にやりと笑った口もとに、すけた前歯がむきだしでいた。

佐和子の心は、一瞬に冷却した。一日の時間が、これほど長く感じられたことはない。清一は無口で、町の繁華街を歩いても、自分からはほとんど口をきかず、喫茶店に入れば、ただ黙って目をふせているだけ。その場の空氣のぎごちなさにてれてか、彼は気まずそうにストローの包装紙を指で丸め、それをテーブルの上にのせて水をかけ、

「ほら、虫みたいに動きますよ」

そうかと思うと、マツチ棒を何本かテーブルにならべて、家を作り、この一本を動かして家の方向を逆にするには……などと、およそ意味のないことばかりするのに、佐和子はたまらなくなり、ジリしてきた。

ああ、会うんじゃないかと思ったと思う。ペンフレンドとは、やはり手紙のやりとりだけに、夢をたくすものなのだろう。



「ねえ、そろそろいきましようか」

と腕時計を見、喫茶店のガラスドアをあけて外へ出たとき、佐和子は、ついにひとつの決意をかためたといつていい。

ふりだしにもどそう、もう一度。もしも、これから歩いていく道の踏切がしまっていたら、思いきってそうしよう。

だが、これまでの関係にハサミをいれるのは、たとえ、どんなに時間をかけてうまくやっても、相手に、なんらかの打撃を与えずにはおかない。なにしろ、彼のほうは熱っぽく迫ってきているのだ。その結果の上京となった以上、そして佐和子のほうでも、彼のひたむきな姿勢を受けてたつたからには、やはり気がひける。

だから、もしも踏切がスナリ通れたら、いままでのように文通をつづけていてもいいのだ。気のすすまぬ手紙を書くのはつらいが、それでも大勢の友だちの一人と思えば、彼のような若者がいたつて、別にこちらの生きかたが、それで左右されるものでもないはず。佐和子はそう思う。

ランプのうらないみたいに、踏切に賭けるわけではなかったが、佐和子は、正直いつて、どうしていいのかわからないのだった。清一にすまないという気持ちと、でも、自分の感情はまげられないという思いが、ごっちゃやまぜになって、胸の内がわに渦まいている。ちようと、道ばたに舞いあがるほこり風みたいに。

バス通りは、カーブしていた。

だから、すぐ先の踏切がしまっているかあいているか、たしかめることはできなかったが、オーバーの襟をたて、マフラーに首をうずめていく人びとの流れに押されて、二人は問題の踏切へむかつていく。

十字路をこえれば、もう目と鼻の先に踏切があつた。遮断機は、空中に上がっている。

佐和子は、ほっと息をつき、走ってわたつた。清一が、大またのコンバスで後につづく。

さあ、いまのうちに……佐和子の足は、自然と早くなる。彼女の心の決意を読みとれぬ清一が、あたふたと肩をならべた。二人が踏切の軌道内に大急ぎの足をいれたとき、ブザーが鳴り、たちまち警報機が鳴りはじめた。チン・チン・チン……という音とともに、遮断機がおりてくる。一息に、むこうがわへ走ってぬけるつもりだった佐和子の肩を、ぐいとひきとめて、

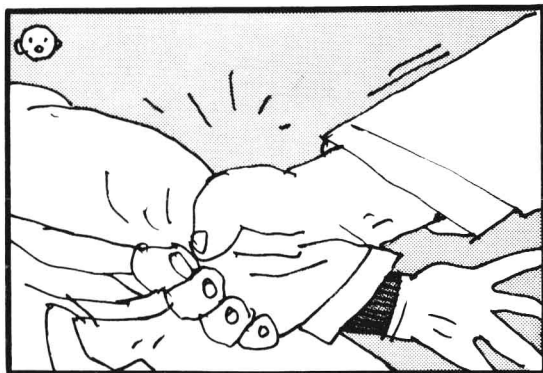
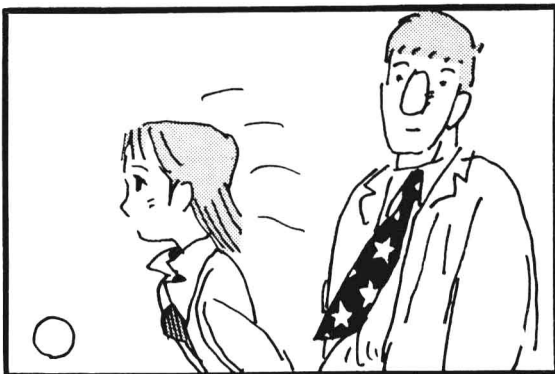
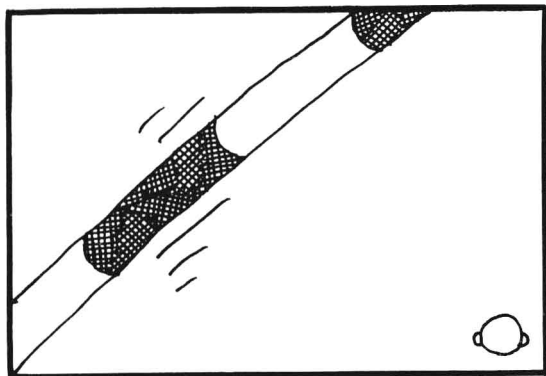
「だめ、だめ。無理しちゃ……」

なにも知らぬ清一が、そういつて、彼女の足をひきもどした。

「ああ！」

佐和子は、思わず吐息をもらした。

これで、おしまいだ、なにもかも。清一さん、なぜとめたの？
悪いけど、おぼえていてちょうだい、いまむこうがわへ走っていきかけたあたしをひきとめたのは、清一さん、あなたの手だってことを！



二人の眼前でしまった踏切は、容易にあかなかった。

ここは、私鉄線に国電が、わずか三十メートルたらずの間隔で並行していて、両方の遮断機がかわるがわる下ろされるので、下町一といわれるほどのすさまじい混雑になる。一日のうち、どちらかの遮断機が下りているのが、ざつと七時間半をこえるといわれ、通称「あかずの踏切」ともよばれていた。だから、一回でスナナリ通れるはずはないと思っていたが、それにしても、夕方のラッシュどきとあつて、電車は休みなしに目の前を往復し、踏切の前の混雑は、しだいにはげしさを加えてきた。

人びとは、吹きつさらしの寒風にふるえながら、みないらだたしげに足踏みをはじめた。怒りにふくれあがつた顔、困惑した顔、顔と顔が、あたりにひしめく。

「ひどいですね、こりや……」

さすがにたまりかねて、清一が重々しく口をひらいた。

「ええ、ここ、どうしようもないんです。立体交差にしようっていう陳情も出ているそうですけど」

しかし、「あかずの踏切」だとは、佐和子はいわなかった。めつたにあかないことを予測して、清一との友情を賭けたとあつては、自分で自分に気がひけるといふものである。

群衆は、さらにふくれあがってきた。待つ身になると、わずか五、六分のものでも、その数倍もの長さとして感じられる。ついに遮断機の前にいた学生風の男が、憤怒の声でわめきだした。

「くそっ、いつまで待たすんだ」

すると、声が声を誘発した。怒りが怒りにつながって、

「もう一五〇人はいるぞ」

「電車をぶつとめちまえ」

「ああ、腹がへつたよう」

「カアちゃんに会いたいぞう」

学生風の男は、遮断機を指ではじいて、しきりとつばを吐きすてた。その力に押されて、遮断機が吊橋のように上下にゆれる。警報機はこわれたように鳴りつづけ、背後に鋭いクラクションがはじけた。

「踏切番、どこに耳がついてるんだ？ ちょっとぐらいあけろ」

サラリーマン風の男の、酔った声だった。

「そうだ、あけろ！」

学生風の男。

「あけんか！」

「あけろ！」

ただならぬけはいに、佐和子は息をつめる。

この町に住む彼女には、あかずの踏切がしまつたからには、もうどうしようもないとあきらめる意識しかなかったが、フリーの通行人や車には、のんびりと待つゆとりがなかった。といっても上り下りの電車は、つきつきとやってくるのだ。踏切番の立場からは、絶対にあけるわけにはいかないだろう。